

プロミシユース解縛

抒情劇 四幕

小倉 武雄

登場人物

プロミシユース。	アポロ。	ハーキュリーズ。
デイモゴーン。	マーキュリー。	ジュピターの幻。
ジュピター。	エイシヤ	地球の精。
地球。	パンシー	月の精。
大洋。	アイオウニ	時間の精達。

精霊達。木霊達。森の精達。復讐の精達。

第一幕

場面。 インドコーカスの連山中の氷でおおわれた岩山の峡谷。

幕があくとプロミシユースはすでに岩壁に縛りつけられている。

パンシーとアイオウニがその足もとにいる。時は夜。この場面の

間にゆっくり夜があげて朝になる。

プロミシユース。 お前と、生命あるものの中ではわたしだけが、

眠れぬまなこでながめている、あれらの輝きつつ回転する

天体に群がる、わたし以外の神々、もろもろの霊たち、

超自然のすべての精神の王者 ジュピターよ!

汝の奴隷どもで雑沓するこの地球を見よ、お前は

彼等のひざまずいての崇拜や祈りや請願や、また

労苦、失意、傷心の無数の犠牲に対して

恐怖と自己軽蔑とむなしい希望をもって報いている。

また、お前の憎悪を受けて向う見ずになった

敵のわたしを、今こそ、おのれの悲惨な境遇を

みずからの手によって支配する者にならせているが

そのお前の復讐も空しくお前は嘲笑を受けるようになるのだ。

5

10

眠りによって保護されることの長い三千年、その刻一刻は
烈しい苦痛のために細分され何年にも感じられる。
苦痛と孤独、屈辱と絶望—これがわたしの領域だ— 15
ジュピター！ もしもわたしが面目をすて、汝のよこしまな
恥ずべき暴虐に加わり、暗く、荒れさびれ、生氣なく、果しなく、
虫もけだものも棲まず、ものの形も生命の音もない
驚も飛び越え得ない高山の岩壁のここに
縛りつけられ、つるしさがられているのでなかったら、 20
お、ジュピター！ 望ましくもないお前の王座から
今もお前が見ている姿よりははるかに立派なものであろうに。
あ、悲しや！ 苦痛、終ることのない永遠の苦痛！

変化も合間も希望もないとは！ しかもわたしは生き続ける。
地球にたずねるが、山々はこれを感知していないのか？ 25
かなたの天空よ、万物をさらけ出す太陽は
これを見なかったのか？ 嵐にも風にも 下界にひろがり
天空の絶え間もなく変化する姿を映す海の
無情な波は、わたしの苦悶を聞かなかったのか？
あ、悲しや！ 苦痛、終ることのない永遠の苦痛！ 30

のろのろと流れる永河は月明りの夜には氷りつき
つららの先端でわたしを突刺し、日光に照らされて光り輝く、
氷柱の連鎖は冷たく骨に喰い入って激しい苦痛を与える。
大空の秃鷹は、お前の命令をふくみ、
毒に汚れたくちばしでわたしの心臓をひき裂く。 35
えたいの知れない物の姿がそばにさ迷い来て、
夢の国の恐ろしい人影はあざ笑って過ぎ行き、
地震を起す鬼神は、お前の命令をうけて、
脈動しているわたしの傷から力のかぎり鋏をねじ取り、
岩石は背後で裂けまたふたとびとじる。 40
嵐をおこす鬼神どもは、そのゆれさわぐ深淵から

うなりほえて群がり集り、あらしの騒乱をかきたて
 身を切る霰を降らして苦しめる。それでもなお、
 日は朝の白霜を消し散らし、夜は
 星でちりばめられ、おぼろに、しのびやかに、 45
 東の方へのぼろうとも、昼も夜も
 のろく過ぎてゆく時間を、そのときこそ、導いているので
 わたしは楽しいのだ。そしてやがて未来のある時は——
 腹黒い司祭がいやがるいけにえをひっぱるように——
 ジupiterよ、お前をひきずってゆき、この蒼白の 50
 わたしの足からしたたる血を唇で拭い去らせ、その時この足は、
 お前のようなみじめな奴隷を軽蔑しないならば、お前を踏みにじるであろう。
 軽蔑などするものか！ 憐れむのだ。どのような不運が
 護るものもないお前をお前の無限の領域のすみずみまで追いたてることだろう！
 お前の魂は恐怖のためにその奥底まで裂け、お前の身の中で 55
 地獄のように口をあけることだろう！ わたしは悲しんで語っているのだ。
 勝誇って言っているのではない。悲惨な境遇の経験が
 わたしに分別を与えた今は、もう憎悪の気持はもっていない。
 前にお前にあびせかけた呪詛の言葉を取り消そう。
 音さまさまの木霊達が、奔流のしぶきの間から 60
 あの呪詛の言葉をなりひびかせた山々よ！
 わたしの呪詛の言葉を聞いて震え、おののきながら
 曲りくねってインドを貫いて流れ、身もちぢまる
 この寒気に氷りつきそよもしない水源よ！
 太陽が光を放たず燃えながらのぼる早朝の静かな大気よ！ また 65
 お前よりも鳴りとどろく雷鳴がこの地球をゆり動かしたとき、
 翼を空に舞わせせ、あの静まり返った地獄の
 深淵の上におおいかぶさっていた迅速な旋風よ！
 わたしは今ではあの時とはちがひ、少しでもよこした望はみな
 心の中で消え、憎むべきものの記憶は少しもないが、 70
 あの時のわたしの言葉に威力があったのなら
 あのわたしの言葉の威力を今もなくさないでくれ！

あの呪詛の言葉は何だったのか？ お前達はみな聞いたではないか？

第一の声（連山から）。

山々は、地球が生れたはじめから

地震がひそむ上に立っていた。

人間が恐怖で動揺するごとに

我々多勢の者もおののいた。

第二の声（水源から）。

雷電がわれわれの水を干あがらせ、

われわれは恐ろしい血で汚されていた。

虐殺の悲鳴をききながら、忍びやかに

都市や荒野を流れていった。

第三の声（空気から）。

わたしは、地球が生れたはじめから

わびしい荒野を色づけてきたが、

わたしの静かなやすらいは、いくたびか

断腸のうめきで破られた。

第四の声（旋風から）。

われわれはこの山々のすぐ下で、

流れてやまない永劫の間、

空を舞っていた。雷鳴も、火を噴く

かなたの火山も、天の神も地の神も、

われわれを驚かせて黙らせはしなかった。

第一の声。

お前の苦しみ声を聞いた時のようには

われわれも雪をかぶった嶺を下げたことはなかった。

第二の声。

われわれは、インドの海にあのような

音を運んだことは一度もなかった。

荒海の上で眠っていた舵手は

苦しみ悶えて甲板からとび上り、

その音を聞いて、あゝ、悲しと叫び、

80

85

90

95

荒れすさぶ波のように狂って死んだ。

第三の声。

わたしの静かな領域は、地から空まで、
あのような怖い言葉で裂かれたことはなかった、
その傷跡がとじたとき、日の光をおゝって
血のようなうす闇がたれこめていた。

100

第四の声。

それでわれわれはしりごみした。氷結した
洞窟へつれてゆかれる破滅の予感が
われわれを黙らせた——こうして—こんなふうに一
黙っているのは堪えがたい苦しみだけれども。

105

地球。 けわしい岩山の物言はぬ洞窟がそのとき

“苦痛”とさげび、広大な天は“苦痛”と答えました。

大洋の血色の波は陸地に溢れ流れ、
打ちつける風に“苦痛”とわめき

110

青ざめた国民達はその声をききつけました。

プロミシユース。 いろいろの声のひびきが聞えたが

わたしが発した声ではない。母なる地球よ、お前の息子達と

お前は、このわたしを軽蔑しているが、わたしの不屈の意志が無かったら、
彼等もお前も、朝風に吹き散らされる霧のように

115

ジュピターのはげしい無限の威力の下で消えてしまっていたのだ。

タイタン一族よ！ お前達はわたしを知らないのか？ わたしを除いて
他のすべてを征服している敵をこの苦痛で防いでいるわたしを。

おゝ、いまはるか下方に冷たいもやを通して見える

120

岩でかこまれた草原と雪どけで水かさの増した河よ！

わたしは、エイシヤの愛にみちた眼から生命を吸いとりつつ、
お前達を覆いまもる森の中を彼女と共にさすらい歩いたのに、

お前達を生み出す地球の精は、至高の者を支配し

喘ぎなやむ奴隷どもの苦しみのうめき声で

125

お前達のうす暗い峡谷や動きただよう海洋を
満たしている者の虚像と暴力を、ただ一人、

悪魔のひく戦車を阻む人のようにくいとめているこのわたしと、
いま語り合うのをどうして拒んでいるのか？

お前達はなぜやはり答えないのか？ 兄弟たちよ！
地球。 答えられないでしょう。

130

プロミシユース。 誰が出来るのか？ もう一度呪詛をき、たいのだ。

おや、何というおごそかなさ、やき声が聞えはじめたことか！
人の声のようにではない。落ちる前にちかちか光る稲妻のように
わたしのからだの中がちくちく痛む。話してくれ、地の精よ！

お前の正常の音声ではないつぶやきから、わたしのそばで
お前が動いているのを感じるだけだが、わたしはその声を愛する。
一体わたしはどんなふうに彼を呪ったのか？

135

地球。 死者の言葉に

精通していないあなたがどうして聞けましょうか？

プロミシユース。 お前は生きている精だからそのように話してくれ。

地球。 わたしは生きているものの言葉では話せません。

140

ジュピターが聞きつけたら、いまわたしが回転している
この地軸よりもっと苦しい車軸にわたしをしばりつけるでしょう。

あなたは敏感で善良です。天上の王者たちには

この声は聞えなくても、あなたは賢くやさしいから

ジュピターよりも偉いのです。さあ、じっとおき、なさい。

145

プロミシユース。 わたしの心の中を、おぼろげな幻のように入り乱れて、
恐ろしい観念がつぎからつぎえとすみやかによぎり通る。

愛の抱擁で結ばれる人のように、わたしは気が遠くなる。

それでもわたしは楽しくない。

地球。 い、え、あなたは不死ですから

あなたには聞えません。この言葉は死の運命を負う

150

人たちにだけしか判らないのです。

プロミシユース。 お、悲しそうな声よ！

お前は一体何者なのか？

地球。 わたしは地球の精です。

あなたの母です。鋭敏な歡喜の精気のあなたが、

光り輝く雲のようにわたしの内部から発生したとき、
 歓喜の情が、わたしの岩脈の内部で、 155
 霜空にまばらな葉が震え高くそびえる木の
 もっとも微細な繊維のすみずみまで、
 生きたからだの中の血液のように循環しました。そして
 苦しみ悩むわたしの子供達は、あなたの声をきいて、
 力のつきた額をおこし墮落の屈辱から抜けようとしてしました。 160
 そこで、全能を誇る暴君はひどく恐れて青ざめ、
 その雷鳴によってあなたをこゝに呪縛したのです。
 さあ、光り輝いてわたしたちの周囲を回転している
 無数の天体をごらんください。その住民たちは
 無限の天空の中でわたしの輝きがうすれるのを見ました。 165
 海には異様な嵐がおきて波がたちさわぎ
 白雪に輝く山々は地震にひき裂かれて新火山が噴き出し、
 暗い天空の下で不吉な煙を噴き乱しました。
 雷光と大洪水は平原をかきみだし、都市は荒廃して
 青黒いアザミが咲き誇り、餌をあさるひきがえるが 170
 肉慾に耽っている寢室を喘ぎながらはいまわり、
 人間とけだものと虫けらには疫病と飢餓が、
 草木には害毒のはげしい枯凋病が襲いかかっていました。
 そして、悲しみのためわたしのひ弱い胸の栄養が衰え、
 麦やぶどうや牧草の中にまじって根だやし出来ない
 毒草がはびこり、それらの成長をさまたげました。 175
 そして、わたしの呼気の軽やかな空気は、
 子供達を虐待するものにむかって吐きかける
 母の憎悪の害毒のために汚れました。
 あなたは、あなたの呪詛を思い出せなくても、 180
 わたしの無数の海や河や山や
 洞窟や風やかなたの無限の大气や、そしてまた
 物言はぬ死者たちは、秘めた呪文として
 忘れないでいます。わたしたちはあの恐ろしい言葉を

歡喜と希望を抱いて秘かに思い耽っていますが、

口に出しては言えません。

185

プロミシユース。

神々しく尊い母よ！

生きる苦しみをなめているものは誰でも、つかの間のものではあっても、

花や果実やたのしい歌声や愛などのたのしみを

お前からいくらかは受けているのに、これらはわたしの楽しみではあり得ない。

どうか拒まずにわたし自身の言葉をきかせてくれ。

190

地球。 それでは話してあげましょう。バビロンの都が

まだ荒れさびれなかったころ、わたしのいと子

メイガス・ゾロアスターは花園を歩いている身分の姿に出会いました。

彼は人間の中でたゞ一人自分の幽霊を見たのです。

それは生と死の二つの世界があるのを思えばわかるでしょう。

195

一つはあなたが現在見ている世界ですが、も一つは

死の彼方であって、そこには現在思考し

生きているすべての人間の幻が住んでおり

人間が死ぬとそれと合体して離れなくなるのです。

それらは人間の夢、人間のはかない幻で、

200

すべて信仰から生れ、愛情の望むものであり、

恐ろしく、神秘で、おごそかで、うるわしい形態なのです。

あなたはそこにいます。そして旋風がたびたびおこる山々の間に

もがき苦しむ幻となってつるされています。すべての霊も、また、

混沌として名づけようのないもろもろの世界の支配者の

205

巨大な王たちの幻もそこにいます。英雄も、人間も、けだものも、

そして驚嘆すべき幽暗のデイモゴゴンも、そして、また、

輝く黄金の王座についているあの至高の暴君もいます。

息子よ、それではみんなが覚えているあなたの呪詛を

それらの誰かに言わせましょう。あなたの気のむくまゝに、

210

あなた自身の幻なり、ジュピターの幻なり、ヘイデイスか

タイフォンか、または、あなたが不幸な境遇におちてから

殖えてやまない邪悪から生れ、征服されたわたしの息子達を

踏みにじったもっと強い諸霊の幻を呼び出しなさい。

尋ねて見ればきっと答えます。そんなふうにして

215

ジュピターの復讐は、荒れはてた宮殿のさびれた門を
雨を含んだ風が吹き抜けるように、空虚な
幻どもの間を通りすぎるでしょう。

プロミシユース。 母よ、禍のたねとなることや
わたしに似ているもののことは何事でも

もうふたたびわたしの口から洩されないようにしてくれ。

220

ジュピターの幻！ 姿を現わせ、たち現われよ！

アイオウニ。

わたしの翼は耳をおゝってひろがり

重なりあって目をとざしているのに、
その銀色に輝く翼のかげから、また、

音をやわらげる羽毛を透して
幻が一つ見え、とゞろく音がきこえます。

225

どうか、その幻が、ひどく傷ついた
あなたの禍になりませんように！
やさしい姉妹のエイシャのために、わたしたちは
あなたのそばでいつもこうして見張っています。

230

パンシー。

きこえる音は黄泉の旋風の音、

地震と電光と山々の裂ける音です。

あの幻は音におとらず恐ろしく

星を織り込んだ深紅色の衣装をまとっています。

ゆっくり動く雲に乗り、光のうすい金の王笏を

235

静脈のあらわに見える片手に持って

威張った歩調を支えています。

他を苦しめても、他からは苦しめられないものにふさわしく、

残酷ながらゆったりと力強い様子をしています。

ジュピターの幻。 この異様な世界の不思議な神々は

240

はかない無力の幻であるこのわたしを、恐ろしいあらしに向って
なぜこちらへ駆りたてたのであろうか？ 色青ざめた仲間どもが
暗闇の中でこわい話を交す声とはちがい、今わたしの

唇のあたりに漂っているこのきゝなれない音声は何であろうか？
それから、ごう慢な受難者よ、お前は一体何者なのか？ 245

プロミシユース。 お前のうつし身さながらのその恐ろしい姿は
お前の投影にちがいない。わたしはお前の敵、タイタンだ。
どんな思考もお前の意味のない声に生气を与へはすまいが、
わたしが聞きたがっている言葉を語れ。

地球。 きゝなさい！ うす暗い山々、年をへた森、予言の洞窟、 250
ものの化のおとずれる泉、小島をめぐって流れる小河よ、
お前達はこだまを返してはならないけれども
お前達の語れない言葉をよろこんできゝなさい。

幻。 ある勢力がわたしをとらえて内部で語り、 255
雷光が雷雲をひき裂くようにわたしをひき裂く。

パンシー。 そら、彼はいかめしい顔をあげ
空が曇って来ます。
アイオウニ。 彼が話します。おゝ、わたしをかばって下さい！

プロミシユース。 まるで巻ものに書きしるされているような
おごり高ぶり、冷やかなそ振り、きっぱりした挑戦と冷い憎悪、
おちつきはらって己を嘲るような絶望の顔つきから 260
呪詛の言葉は読みとれるが、しかし言葉で言え！ 語れ！

幻。

悪神！ わたしは冷静に心をおちつけお前に戦を挑む。

お前はわたしに与え得るかぎりの苦痛を与えるがよい。

神々と人類のいまわしい暴君、お前にも、

わたしという唯一人の人間は征服させぬぞ。 265

さあ、こゝにいるわたしに苦痛と恐ろしい疫病と

心を狂わす恐怖を雨のようにふりそゞげ。

そして寒霜と熱火をかわるがわる

わたしのからだに喰い入らせ、荒れ狂う

嵐の中で突進する電光と肉を裂くような霞と 270

地獄の復讐の怨霊の無数の姿をお前の激怒とせよ。

そうだ、どんなひどい事でもやって見よ。お前は全能だ。

わたしはお前に、お前自身とこのわたしの意志とをのぞく。
あらゆるものを支配する権威を与えた。お前の効き目の早い害毒を

あの空にそびえる塔から人類に与えて破滅させよ、 275

わたしが愛する人々の心の闇路に

お前の有害な精気を活動させよ。

わたし自身には、お前の憎しみの

もっともひどい苦痛を祈り求める。

そして、お前が天上で支配するかぎりは、このように、 280

横たえることの無い頭を絶え間の無い苦痛にゆだねるのだ。

しかし、神であり主であるお前、お、その精気が

この悲しみの世界にみなぎりわたるお前、

地上天上のあらゆるものが恐れうやまい

服従するお前、すべてにわたって万物を支配する敵よ！ 285

わたしはお前を呪う！ 受難者の呪は

その迫害者のお前に、悔恨のようにからみつき、

毒のある不吉な苦痛の衣となって

お前の無限の特性をお、いまとい、

お前の全智全能は苦痛の冠となって 290

輝く金のように、お前の失神する頭脳にからみつけ。

善も悪もともに宇宙のように、お前のように、また

お前自らを責める孤独の煩悶のように無限であるから、

この呪詛の力によってお前の心身に悪行をつみ重ね

善を傍観するものとなって呪われよ。 295

お前は今平静な力のおごそかな姿として

お前の座を占めているが、やがて時が来れば

お前はお前の心底にある本性の姿となり

不実で無益な罪の数々を犯したのち、

無限の空間と時間をつらぬいてお前が徐ろに 300

没落するとき、嘲笑がお前につき従うであろう。

プロミシユース。これがわたしの言葉だったのか、母よ？

地球。

そうでした。

プロシユース。 わたしは遺憾に思う。言葉とは性急で愚なものだ。

悲しむときは道理が判らなくなる。わたしの言葉もそうだった。

わたしはどんな生きものにも苦しみを受けさせたくないのだ。

305

地 球。

悲しい！ まあなんと悲しいこと！

ジュピターがとうとうあなたを征服しようとは。

陸地よなげけ、音をあげて泣け海よ、

わたしの乱れた心をお前達に応答させよう。

なげけ、生きている、また、死んだ、人間の精神よ、

お前たちを保護する人は倒れて征服されている。

310

第一のこだま。

倒れて征服されている！

第二のこだま。

倒れて征服されて！

アイオウニ。

大丈夫よ！ ほんのひとしきりの発作だけなのよ、

タイタンはいつでも征服されません。

315

ごらんさい、向うの雪をかぶった双子山の

雲の裂け目の空色のところから、

足首の深紅色の小翼の下の

そうびの紅に染められた

象牙のようにきらきら輝く

320

金のサンダルをはいた両足で

吹きおろす風を踏みしめて、

蛇がとりまつわる杖をたかだかと

右手にさしか、げた人の姿が今来ます。

パンシー。 ジュピターの、世界をめぐる使者マーキュリーです。

325

アイオウニ。

顔をしかめておしとめるあの人のうしろで、

蛇の髪の毛、鉄の翼をつけ

たちのぼる雲霞のように風に乗り

絶え間なくわめきさわいでいる
あの群集は何者たちなのですか—— 330

パンシー。

ジュピターが暗黒の雲に乗り
天の境界をひき裂いて地上にのぞむとき、
彼が悲惨と血とで満腹させる

嵐の中に現われる復讐の怨霊たちです。

アイオウニ。

プロミシユースの新たな苦痛を餌食にしようと 335
やせこけた亡者どものもとから連れてこられたのですか？

パンシー。

あの人はいつも変わらずしっかりしています。誇らずに。

第一の怨霊。 やあ生きものがいるようだ！

第二の怨霊。 その目をちょっとだけのぞかせておくれ！

第三の怨霊。 屍体の山の臭が、いくさのあとで屍肉をついばむ鳥を
誘惑するように、そいつを苦しめたい望みがわたしを誘惑する。 340

第一の怨霊。 マーキュリー様。あなたはあえてためらっていらっしゃる！
勇気を出せ怨霊ども。メイヤの息子がもうすぐわれわれの餌食となり、
遊びものとなるとしたらどうだろう——一体誰が長い間
ジュピターのお気に入られようか？

マーキュリー。 貴様たちの鉄の獄舎へ帰り、

餌にありつかず、黄泉の火と嘆きの川のほとりで 345

餓えて歯ざしりをせよ。ジリアン、前へ出ろ！ それからゴーゴンも、
キミイラも、それから汝も、もっともこうかつな魔神、
天の毒酒のような非道の愛慾とそれから生れた
もっと非道の憎悪をテーベに与えたスフィンクスも。

このものたちに貴様たちの仕事をやらせよう。

第一の怨霊。 お、どうかお慈悲を！ 350

期待のために目がくらんでいるのです。追い返さないで下さい！

マーキュリー。 それならおとなしくひっこんでおれ。

おごそかな受難者よ！

わたしは気のすゝまぬまゝ、ほんとうに不本意ながら

ジュピターの意志に強制され、この上新たな

復讐の罰を果たすためにやって来たのだ。あゝ、気の毒な！ 355

これ以上のことは何も出来ないと思うと自分が嫌になる。
苦痛を忍ぶお前の姿を見てからジュピターの天国に帰ると
しばらくの間は天国が反って地獄のように思える。そして
非難を微笑で示すお前のうらぶれた姿が、夜となり昼となく
わたしにつきまとうのだ。お前は賢く意志固く立派だが
全能者に逆ってたゞ一人孤立するのは無益のことだろう。
それは、ものうい年月を計り分つ日や月の支配の及ばぬ
時間の無い世界へ逃れることが出来ないのは

大昔から明らかであり、またこれから後もずっと
そうであるにちがいないのと同じことだ。お前を苦しめる者は 365

今やまさに、思いも及ばぬ苦痛を与える不思議な力を身につけ、
地獄の絶えることのない苦悩を計画する怨霊の勢揃いをさせている。
そして、それらのものや地獄に住むもっと悪がしこく忌まわしく
残忍な怨霊どもをこゝえつれて来たり、またそれらのものに
お前を苦しめる仕事をさせるのがわたしの務めなのだ。 370

そうでなくてほしいものだ！ お前だけが知っており、
他の生きものは誰も知らない秘密があり、
それが広大な天国の支配権を他に渡せるので
ジュピターは恐れてなやんでいるのだ。

お前はそれを言葉で述べ、ジュピターの王座の前に 375
とりなし役として願ひ出させ、謙虚な心で祈りをさゝげ、
どこかうるわしい聖堂で祈り願う人のように
お前の意志をお前のごう慢な心の中でひざまづかせるがよい。

敬慕と柔和はもっとも狂暴で無上の権力者の
気持をさえやわらげるものだから。

プロミシユース。 よこしまな心は 380

善を変えてその性情に合はせるものだ。彼が持っている
一切の権力はわたしが与えたものなのに、そのお礼として、
太陽の熱がわたしの干からびた皮膚をひき裂き、
月の冴えた夜には雪片がわたしの頭髪にまつわりついても、

夜も昼も何年も何時代もわたしをこゝに鎖でしばっている。 385

そしてその間、わたしの愛する人類は
彼の思想を実行するしもべどもに踏みにじられている。
暴君がくれる報酬とはそのようなもので、それも当座のことだ。
心のよこしまなものは幸福を受けることが出来ず、
世界をもらっても、昔の友人に対しても 390
憎悪と恐怖と屈辱を感じるだけで、感謝の心はなく、
自分の悪行に対してわたしに報復しているだけだ。
そのようなものに対する親切心は反って鋭い咎となり
復讐の目ざまい眼りを突刺してよびさますことになる。
屈しようなどとは思ひもよらないことだ。というのは 395
馬の尾の一筋の毛で吊されたシシリア人の剣のように
彼の王冠の上に震えちらついていて、人類俘囚の
最後の決定である彼の没落についての
運命によって決められた言葉を打明けることのほかのどんな服従をも
彼は望まないであろうし、またわたしもそれを認められようか？ 400
わたしは決してそんな事は認めない。他のものは、束の間の
全能の座についている邪悪なものに媚るがよい。彼等でも安全である。
それは、罪を犯すものはその罪によってすでに十二分に罰せられているから
正義が勝利をかちとるとき、正義は自分が受けた虐待を憐み
自分に虐待を加えたものを罰しようとは思わないからである。 405
わたしは、このように苦痛をこらえ、お前と話してからでももう
次第に近づいている因果応報の時を待っているのだ。
そら怨霊どものさわぐ音がきこえる。ぐずつくことをおそれよ。
ジュピターの怒りのために空が曇って来たではないか。
マーキュリー。 おゝ、わたしがお前を苦しめず、お前が 410
苦痛を受けなくてもすむようにもう一度答えてくれ。
お前はジュピターの支配権の続く期限を知らないのか？
プロミシユース。 その時が必ず来るといことだけしか知らぬ。
マーキュリー。 あゝ、それでは、
お前はこれから先の苦痛の年月が数えられないのか？

プロミシユース。 ジュピターが支配する限り続くだろう。それ以上も 415
それ以下も望まぬし、また恐れもしない。

マーキュリー。 だが待て、時間を記録した
永劫の中に思いをひそめて考えて見よ。その中にあっては
われわれが幾千年にわたって思いめぐらした時間も
すべてたゞの瞬にすぎず、その絶えることの無い経過を
計ることに倦いた心はうみ疲れてたゆみ、ついには 420

萎れ、くるめき、知覚を失い、消耗し、かばうものもなくなるのだが、
お前は許されることなく苦痛を受けてすごさねばならぬ。

長びく年月を思い計ったことはないのだろうか？

プロミシユース。 それはどんなに思いめぐらしても数えられないだろうが
現実には経過しているのだ。

マーキュリー、 その間中官能的な快楽のたのしみにひたり 425
神々の中にまじって住めるとしたらどうか？

プロミシユース。 この吹きさらしの
峡谷を去り、悔いることのないこの苦痛を脱れようとも望まぬ。

マーキュリー。 あゝ、お前の心意気には驚嘆するが気の毒に思う。

プロミシユース。 太陽の光線のようにおだやかな平安が心に宿っている
このわたしではなく、みずからの良心に恥じるところのある 430
ジュピターの従属者などを憐むがよい。問答は全く無益だ！
怨霊どもを呼びよせるがよい。

アイオウニ。 おゝ、姉妹よ、まあ！ あの大きな
雪をかぶった糸杉は電光にうたれて根元までひき裂けました。

そのうしろでは、ジュピターの怒りの雷鳴がもの凄く鳴りひびいています！

マーキュリー。 ジュピターの命令にも、お前の言葉にも従わねばならぬ。 435
わたしの心は自責の気持で重くとざされている。

パンシー。 足に小さな翼のついたマーキュリーが
明けがたの斜にさす朝日の光を駈けおりて来ますよ。

アイオウニ。 さあ、さあ、あなたの目をあなたの翼でおゝいなさい。
見たらあなたは死にますよ。来ます、来ます、怨霊どもが。 440

無数の翼で朝日の光を暗くして、その下に来る
すべてのものを死のように呑みつくそうとしてやって来ます。

第一の怨靈。

プロミシユース奴!

第二の怨靈。 不死不滅のタイタン奴!

第三の怨靈。

人類の擁護者奴!

プロミシユース。 恐ろしい声がよびたてる呪縛されたタイタン、

プロミシユースはこゝにいる。すさまじい姿の物の化どもよ、

445

お前たちは一体何ものなのか? おぞましい怪物でみちている

ジュピターの思想から生れたこのようにいまわしい亡霊どもが、

おそろしいもののひしめきあう地獄から来たことは今まではなかった。

このように厭わしい怨霊どもの姿を見ていると、

わたし自身がすぐ自の前のいとわしいものと同じ姿になり

450

それらと同じ気持になって嘲笑し見据えるように思われる。

第一の怨靈。 われわれは苦痛や恐怖や絶望や

不信や憎悪、また犯した人にまつわりつく罪などの

手さきものだ。そして、傷ついて喘いで逃げる仔鹿を、

森を越え湖をわたってやせ犬どもが追跡するように、

455

ジュピターがわれわれにくれて思いのまゝにさせてくれるとき、

嘆き苦しみながら生きているすべてのものを追いかけるのだ。

プロミシユース。 おゝ判った! お前達は一つの罪の中に数多くの

恐ろしい性格を持っているものたちだ。そして、湖もこだまも

この暗まりとお前達の翼のひびきを感知している。しかし

460

罪悪のいとわしい姿よりもさらにみにくいお前達は

なぜ無限の奈落からこゝに群り集っているのか?

第二の怨靈。 そんなことは知るものか。みんな、よろこべ、よろこべ!

プロミシユース。 おのれのみにくさをよろこべるものがあるだろうか?

第二の怨靈。 うっとりする美しさを互に眺めあって

465

恋人同志はうれしがる。わしらの場合もその通り。

色あおざめた尼がお祭の町の花冠にするために

そうびの花を手折る時、その淡く美しい紅色が

尼の頬を染めるように、わしらの犠牲になるものの

あらかじめ決った苦痛の幻影が、

470

わしらを衣のように装いつゝんでわしらの姿を作るのだ。

そうでなければ、わしらは夜の闇のように決った姿を持たないのだ。

プロミシユース。 わたしはお前たちの力も、お前たちをこゝへよこした者の
権力をも軽蔑しきって嘲笑する。さあ人間必受の不幸の運命を泣け。

第一の怨霊。 お前は、わしらがお前の骨も神経もばらばらに引裂き、
心の中でも火のように燃えて苦しめると思っているのだろう。 475

プロミシユース。 苦痛はわたしの本来の領域だ。憎悪がお前達の
領域であるように。さあわたしを引裂け。少しもいとわぬ。

第二の怨霊。 お前は、わしらが
お前の見開いた目の前で嘲笑するだけだと思うのか？

プロミシユース。 お前たちの行動など考えてはいない。お前たちが
悪であるがために苦しむことを考えているのだ。お前たちや
その他あさましい者どもに陽の目を見せた神は残酷であった。 480

第二の怨霊。 お前は、わしらがまるで寄生虫のように
一つづつお前の心の中に住みつき、その内部で
燃え輝く魂はたとえ蝕みくらすことは出来なくても 485

もっとも賢い人の内心の平静をさえかきみだす
無知でさわがしい大衆のように、そのそばに宿ったり、また、
お前の英知の下にひそむ恐怖心や、
動悸をうつ心臓のほとりのよこしまな情念や、
苦悶のような這いまわる迷路のような血管の中に入って 490
肉慾になるとでも思っているのか？

プロミシユース。 お前たちは現にこゝにいるが、
わたしはわたし自身を支配する者だ。地獄のものどもが
動乱をはじめるとき、ジュピターがお前たちを支配するように
わたしは心の中で苦しみ争う群集を支配するのだ。

怨霊たちの合唱。

夜の墓場の地球のはてから、地球のはてから、 495
朝が牛れる地球のはてから、地球のはてから、

来い、来い、やって来い！

おゝ、都市がこわされてわめき悲しむとき
歓喜の声をあげて山なみをゆさぶるものどもよ。
翼をたゝんでそこを去らず海上を踏み歩き、 500

難破船や飢餓が支配する進路のほとりで、
 飢えて死んだ屍にとまって喜びさんざめくものどもよ。

来い、来い、やって来い！

無気力な国民がまきちらされている

住居は卑しく冷たく血に染まったまゝにし、

505

灰がらの中に埋もれていて将来燃えあがる

火種のように、憎悪を残しておけ。

お前たちがそれをかきたてる時、さらに一そう

残虐な勃発となって復活するだろう。

官能のよろこびに魅せられてはいるが

510

まだ悲惨の火の子を身に沿びてはいない

青年の心に自己嫌悪の気持をおこさせておけ。

お前達が憎悪のために残虐になるより、

地獄をおそれてもっと残酷になる

宗教的狂信の夢想家に、地獄の秘密を

515

全部は知らさないでおけ。

来い、来い、やって来い！

われわれは地獄の広い門から蒸気のように

立ちのぼり、ふきすさぶ大気をなやましているが、

お前たちが来なければ仕事も無駄になる。

520

アイウオニ。 別の翼のとどろくひびきが聞えます。

パンシー。 どっしりとした山々も、動揺する大気のように

なりびびく音で震えているようです。無数の翼の影のために

夜より暗いあき間がわたしの翼の中に出ています。

第一の怨霊。

お前たちの呼び出しは、旋風に乗って、速くはるかに

525

吹きやられる翼のある車のように、われわれを

戦争の流血の巷から連れ去った。

第二の怨霊。

飢饉のために荒れはてた広大な都市から！

第三の怨霊。

呻き声がおぼつかなげに聞え、血がまだ味わわれないうちに。

第四の怨霊。

血が金貨で売買される

530

きびしく冷酷な君主の会議から、

第五の怨霊。

青白く灼熱した溶鉄炉から、

そしてそこには——

ある怨霊。

しやべるな、さゝやくな。

お前達が言いたいことはみな判っているが、

それを言葉にだせば、無敵の者、不屈の精神を

屈服させねばならぬ魔法の力を

破るようになるかも知れぬ。

535

彼は今でも何より強い地獄の力をさえ無視している。

ある怨霊。

未来のヴェールを切りおとせ！

もう一つの怨霊。

切りおとされた。

合 唱

光のうすれた朝の星が

耐えるのもおそろしい悲惨の上にきらめいている。

強いタイタンよ、気が遠くなるのか！ わしらはお前を

540

あざ笑って軽蔑する。お前が人間のためにめぎました

確かな知識を誇るのか？ そのあとで、人間の心の中には

涙の雨をそゝいでも消し難い飢渴の情が生れ、

烈しいいらだちや希望や愛や欲望などが

永久にその心を灼きつくしているではないか。

545

やさしい有徳の人が微笑をたゝえ

血に汚された地上に生れた。

その言葉は死後まで残り、毒薬のように

真実や平和や同情を枯らしつくした。

見よ！ 広い地平線のいたるところで

550

人口稠密の多くの大都市が
晴れた空に火煙をあげて燃えている。

絶望の嘆声のさけびをきいてみよ！

これこそおだやかでやさしい彼の亡霊が

自ら呼び起した信仰を嘆いているのだ。

555

も一度目をこらせ。火焰はほたるの

光ほどにもうすれてしまった。

生き残ったものたちが恐怖におののいて

余燼のほとりに集っている。

歓喜、歓喜、歓喜！

560

過去の各時代はお前の記憶に急速によみがえるが

そのおのおのは悲惨の記憶で、未来はくら闇、そして現在は

いばらの枕のように、眠りを奪われたお前の頭のためにのべられている。

小合唱 一。

烈しい苦悩のしづくが

青白く脈打つ顔からしたゝる。

565

ほんのしばらく弛めてやれ。

幻滅した国家が悲惨から立ちあがり

朝日のように活動をはじめている。

その国家は真理にさゝげられ

自由がその真理を伴っている。

570

愛によって結ばれ、四海同胞と呼ばれる

愛の無数の子供たち——

小合唱 二。

ではない。

見よ！ 血族が互に殺し合っている。

今こそ死と罪惡の収獲の時、

甲斐なくもがく世界を絶望が征服し

575

奴隸や暴君が勝利を得るまで

血が、新酒のように、内部でわき返っている。

〔怨靈ども皆姿を消し一つだけ残る。〕

アイオウニ。 まあ、おききなさい！あらしが海の波をたちさわがせるように、

おだやかですが押しこころしたのではない恐ろしいつぶやき声が
タイタンの心をさいなんでいますよ、そして残忍な者たちは
波の音が海から遠ざかった洞窟で反響するのを聞いています。 580

あなたは悪魔どもが彼を苦しめるさまを見る勇気がありますか？

パンシー。 あゝ、二度まなこを向けましたがもう見たくありません。

アイウオニ。 何が見えましたか？

パンシー。 とてもひどい光景です。

忍耐強い顔つきの若者が十字架に釘づけにされていました。 585

アイウオニ。 その次には？

パンシー。 そのまわりの空とその下の地上いたるところに

心ない人間の手で虐殺されたとてもおそろしい

人間の屍がみち溢れていました。そして中には

人間の心の信仰からよいと信じての仕わざもあるようでした。

それは、睨みつけられたり冷笑されたりして、人間が徐々に殺されていたからです。

そして、話すだけでも心がおびえ生きた心地のしないほどの表情の他の連中が

虐殺の場所のほりをうろついて監視していました。こんなことを見て

この上こわい気持ちを起さないようにしましょう。あの呻きだけでも悲しすぎます。

怨霊。 あの象徴を見るがよい！ 人類のためにひどい虐待に堪え

嘲笑や束縛を忍ぶものは、反って人類にもおのれにも 595

幾百年幾千年の苦痛をつみかさねるものどもだ。

プロミシユース。 眼をいからせているその顔の苦痛をやわらげ、

悲しそうな唇をとじよ。いばらで傷ついた顔に

血をにじみ出さすな。お前の涙と混じるから！

力の弱まったもがきで十字架をゆりうごかさず、 600

青白い指でした、血をもてあそばぬように

心安らかに死んで苦悶する眼をとじよ。

おゝ、おそろしい！ わたしはお前の名を言いたくない。

お前の名は呪となつている。今こそよく判る。賢い者、やさしい者、

高潔な者はお前とよく似ているが故に 605

お前の偽りの信者どもに嫌われ、あるものは

年の若い時に選んだがために嘆くことの長かった

心の思慕から、ざん訴にあってかり出され、あるものは、

目隠しされた白豹がかりたてられた牲鹿にすぎるように、
 からだを損う牢獄に死骸とともにつながれ、あるものは—— 610
 おや、群集が声高にあざ笑っているのではないか？——
 燃えつづく火焰の中で突き刺される。そして広大な領域が、
 海のために押しのけられる小島のようにわたしの足許に漂い、
 そこに住む人々は自分の家の焼ける赤い光のそばで、
 万人の流した血の中に押しつぶされている。 615
 怨霊。 お前は血や火災は目で見、嘆きは耳でできるが、
 もっとおそろしいことが目に見えず、耳に聞えずまだ残っている。
 プロミシユース。 もっと恐ろしい？
 怨霊。 どの人間の心の中にも、心がのみこんだ
 餌食の後に恐怖が残るものだ。どんな高潔な人でも、
 軽蔑して信じたくないと思うすべての事が真実ではないかと心配します。 620
 偽善の神と慣習の神は今の世ではすたれているが
 それらの心は種々さまざまな崇拜の聖堂となる。
 彼等は人間の情態に役立つことを整え得なくせに、
 自分達があえてし得ないことを認めないのだ。
 善良なものには権力に欠け、無益の涙を流すだけだが 625
 権力のあるものには良心が欠け、この方がはるかに有害である。
 賢明なものは愛に欠け、愛情豊かなものは分別に欠ける。
 そして最善の事態がこのように混って罪惡となる。
 権力があり富もありしかも公正でありたいと望みながら、
 誰にも同情しないかのように、苦しんでいる同胞の間に 630
 住んでいるものが多い。彼等は身の処し方を知らないのだ。
 プロミシユース。 お前の言葉は群り集る蛇のようだが
 お前の言葉を聞いても悲しまぬ人々は気の毒に思う。
 怨霊。 そういうものどもを憐む？ それでもほう話すまい！〔消える。〕
 プロミシユース。 おゝ悲しや！
 悲しい！ ほんとうに！ 苦痛、苦痛、絶えることのない永遠の苦痛！ 635
 涙を流すことのないこの眼を閉じても、お前の仕わざは、
 悲しみのために敏感になって心の中にはっきり映る。
 こうかつな暴君！ 苦痛をのがれる道は死ぬことだ。

死はうるわしく立派なものをことごとく呑みつくすが、
わたしは神だから死んで平安を見つけることは出来ないし、

またそうしようとも思わない。なぜなら、ジュピターよ、お前の仕わざは
恐ろしい復讐ではあるが、失敗であって勝利ではないからだ。

お前がわたしを苦しめるこの光景は反ってわたしの精神を強くし、
このような光景が実在するものの姿でなくなる時が来るまで
堪え忍ぶ力を新たに与えてくれるのだ。

パンシー。　まあ、このほかにあなたは何を見ましたか？

プロミシユース。　　語ることと見ることの
二つの悲しいことがある。その一つの語ることは許してくれ。

人間性の自然な本質である神聖な標語があり、
これらは旗じるしとして輝やかしくかゝげられ
国民はつどい集って口をそろえ声高らかに叫んだ。

真理と自由と愛！

たちまちひどい混乱がおのずから天からおこって
彼等の間に斗争と偽瞞と恐怖が生じ、
暴君どもが干渉して支配権を握り獲物を分割した。
これがわたしが見た真理の幻だったのだ。

地球。　苦悩と正義とが与える混った喜びの気持で
あなたの苦痛を感じました。人明の思想の
神秘的な洞穴の中にひそみ、風をついて飛び交う小鳥のように、
世界をとりまく大気の中にすんでいる、靈妙でうるわしい
精霊どもをのぼらせて、あなたの境遇を慰めさせましょう。

このものたちは、未来を鏡に写して見るかのように、
おぼろげな領域の彼方をまのあたり見えています。

このものたちがあなたに慰めの言葉をかけてくれますように！

パンシー。　　おや、まあ、とてもたくさんの精霊たちが
春のたのしい上天気の日雲の群のように
青空にむらがっています。

アイウオニ。　　まあ、まあ、まだまだ来ます。

風が少しもないときに、ちぎれちぎれの列になって
谷の間をのぼって来る水しぶきのように。

聞えるのは何でしょう！ 松風の音からしら？

湖水の波の音からしら？ 滝のひゞく音からしら？

670

パンシー。 何ものよりも少しうら悲しく、はるかに悲しい音です。

精霊たちの合唱。

おぼえていない大昔から、わたしたちは

運命にもてあそばれる人間を

やさしく導き、護り神となって来た。

わたしたちは、人間の思想の

675

大気を吸っているが衰えない。

たとえそれが、嵐のために暗まされ

夕陽だけが斜にさす日のように

陰気で腐って悲しいものであろうとも、

雲のない天空と鏡のような水面の、

680

その間の天気のように晴れやかに

静かで晶明でおだやかであらうとも、

小鳥が風の中にねぐらを求め、

魚が水の中に巣を作り、

人間自身の思考が未来の

685

すべての領域に漂い入るように、

われわれは無限の人間の思想の

大気の中に人知れず住みつき、

その中を雲のように自由に進みゆき、

そこから、お前で始まりお前で終る

690

予言をそっと持って来る！

アイウオニ。 一つづつまだまだ来ます。彼等のまわりの大気は

星のまわりの大気のように光り輝いているようです。

第一の精。

戦斗ラッパの音に乗り、

まっくら闇を空ざまに投げられ、

695

大急ぎでこゝへ飛んで来た。

古びた信仰が減んだ後から、

暴君の権勢がすり朽ちた後から、

入り混った多数の喚声が
運ばれて来てわたしをとり巻いた—— 700

自由！ 希望！ 死！ 勝利！
やがてそれから空の彼方にとび去り、
たゞ一つの音だけが、上方に、まわりに、
下方に、一面に充ち動いていた。
それは愛の精神であった。 705

それはお前に始まり、お前に終る
希望であり予言であった。

第二の精。

虹の橋が海上にかゝり
その位置のまゝ下方に揺れていた。
勝ち誇った嵐が、征服者のように、 710

電光にひき裂かれて形さまさまに、
くろぐろと勢はげしく飛んでゆく
無数のちぎれ雲を捕虜として、
誇らかにその間を吹きすすんでいた。

わたしは雷鳴が哄笑するのを聞いた。 715
大艦隊がもみがらのように散らされ、
船の下方の白波の荒れ狂う海上には
悲惨な死の光景がひろがっていた。

わたしは電光でひき裂かれた大船の上に降り、
自分の板切れを敵に与えてから 720
海にとびこんで死んだ人間の
溜息に乗っていそいでこゝへ来た。

第三の精。

わたしはある聖者の寝台のそばにいた。
彼が心の糧を得ていた書物のそばには
ともしびがあかあかと燃えていた。 725

すると焔の翼をつけた夢の霊が
聖者の枕べに舞いゆらめいて来た。

そして、わたしはそれがはるか以前に
 同情と雄弁とかなしみを
 わきたてたものと同じであることが判った。 730
 また、下界は、しばらくの間、その聖者の
 夢の靈が与えた影響をこうむっていた。
 その夢の靈が願望の稲光のように速に
 わたしをこゝへ連れて来たのだが、
 それに乗って今日のうちに帰らねばならぬ。 735
 聖者がめざめて悲しむといけないから。

第四の精。

詩人の唇の上でわたしは眠り、
 恋の道にくわしい人のように
 詩人の寢息に心をとられて夢を見ていた。
 彼は人間の幸福を求めずまた探さず、 740
 思想の手のどゝかぬ高遠な荒野に住む
 理想の幻影の靈のくちづけを糧とする。
 彼は明けがたからたそがれどきまで、
 湖水にうつる太陽が、さき匂うきづたの花に
 つどう黄蜂を照らすのを見守り、 745
 しかもこれらの自然の現象が何であるかを心にとめず、
 たゞこれから、生きた人間よりももっと真実な、
 永遠なものに育てられる子供である
 もろもろの形態を生み出すことが出来る！
 これらの詩的靈感の一つがわたしを目ざましたので、 750
 あなたを救おうといそいで訪れた。

アイオウニ。

万物のいのちを支える空気のいとし子の双子の精が、
 なつかしい一つの巢に帰る一つがいの鳩のように、
 東と西から速やかに音もたてず翼に乗って、
 大気を滑り降りて来るのが見えませんか？ 755
 まあ！ 楽しいけれども、はかなくあわれな声ですこと！
 あれば愛と結ばれ、音に魅せられた絶望の声です。

パンシー。 あなたは言葉が出せるのですか？ わたしは言葉が出せません。

アイオウニ。 あの精達の美しさがわたしに話す力を吹きこみます。

あの精たちは彼等を空中高くさゝえるそら色の、また、
金色に深まってゆくだいたい色の翼に乗って浮んでいます。
彼等のやさしい微笑は星の光のように大気を輝かせます。

精たちの合唱。

お前は愛の神の姿を見たことがあるか？

第五の精。

大空の未開の広野を

足早によぎってゆく雲のように、人間の思想の広い領域を
わたしがいそぎ通りすぎたとき、星の冠をつけた愛の神が
きよらかに澄みあふれる生命の喜びを、
かぐわしい髪からまきちらし、速い翼の鳩に乗ってとび去り、
彼のゆくところ光明にみちた世界がひらけたが
わたしが通りすぎるにつれて、その光明は次第に消えうすれ
どん慾な破滅の神が口をひらいてついて来て、
恋に狂った立派な聖者、国に命をさゝげた愛国の士、
恋のために身を捨てた青年達が無明の闇路に迷っていた。
わたしはなおもさまよひ続けて行つたが、プロミシユース、
わたしの見た最も悲しいことさえもあなたの微笑によつてたのしい思い出
さになった。

第六の精。

お、姉妹よ！ わびしきはあわれにもたえなるもので、
わびしきは地上をあゆまず、なか空をもさまよはず、
もの柔らかな足どりで通りすぎ、もっともすぐれておだやかな人々の
心に宿るやさしい希望をそっとかきたてるので、その人達は、
頭上に仰ぐ翼と、そのもの柔らかかではあるがいそがしく動く歩みの
妙音になだめられて、はかなく心安らぎ、おさえがたい喜びの
幻影を夢想して愛の神と呼ぶが、目ざめると、それは、
今われわれが出むかえる人と同じく、愛のつきものの苦痛であるのが判る。

合 唱。

たとえ今では破壊の神が、 780

もっとも速いものでも逃られない

死神の翼のある白馬に乗って、

空を吹き抜ける大嵐のように、

花も草も人もけものも、美しいものもみにくいものも、

打ちこわすように踏みにじり、愛の神の 785

跡を追いかけるそのつきものであっても、また、

この恐ろしい愛の破壊者が、心もからだも

不死身であっても、あなたはこれを征服するだろう。

プロミシユーク。 どうしてそうなるのを確信しているのか？

合 唱。

降りじきる雪がすぎ去ると 790

春は大地の下で活気づき、花のつぼみは、

紅の色を深め、微風はにわたこの

林をそよがせ、遊牧の民は

やがてさんざしの花が咲くのを知るように、

われわれが住む人間思想の大気の中では、 795

英知と正義と愛と平和は、

力を増そうと努めるときは、

軟風が牧人への予言であるように、

われわれにとっては、あなたに始まり

あなたで終る予言なのです。 800

アイオウニ。 精たちはどこへいきましたか？

パンシー。 感じだけが

残っています。靈感を受けた声や琴のしらべの

反響がまったく消えてなくならないうちに、次第にうすらぎ、

こだまが奥深い洞穴に反響するように、

人間の心の底知れぬ迷路をめぐるまわるとき 805

反響する音楽の無限の感じのように。

プロミシユース。 空気から生れたこのものたちは何とうるわしいものだろう！

しかし、わたしには愛のほかどんな希望もすべてむなしいものに思える。

エイシヤ。 お前こそ、わたしの心が愛でみち溢れたとき、

それがなければうま酒も乾いた土地に吸いこまれる、

810

葡萄の美酒を注ぎ入れる金の盃のようであったのに、今は遠くはなれている。

あらゆるものはみな静まりかえっている。あゝ、何と重苦しく

この静かな朝はわたしの心にのしか、っていることか。

わたしに眠りが許されているものとして、悲しみながらも

眠ることが出来るなら、夢を見ることもあるだろうに、

815

わたしはそうなることが自分の宿命であるところのものになりたい。

苦しむ人間の救い主になるか、その力のよりどころになるか、

そうでなければ、苦痛もなく慰めも残されていず、母なる大地も

元気づけることが出来ず、天の暴君ももはや苦しめることの出来ない、

万象のはじめのこん沌とした底なしの深淵におちこみたい。

820

パンシー。 あなたは、冷たく暗い夜にあなたを見まもり、

あなたの精気の幻がおとずれるときのほかは

決して眠らない人を、お忘れになりましたか？

プロミシユース。 愛のほかはすべての希望も空しいものとわたしは言った、

お前こそは愛する。

パンシー。 ほんとうに心から。しかし東の空の星があるかく見え、

825

あのかなたのインドの谷間の、悲しい追放の場所で

エイシヤが待っています。そこは、かつてはこの谷間のように

荒れはててうらさびれ、寒さのために氷りついていましたが、

今はきれいな草花や木の花でおゝわれ、

森を通り河や湖をこえ、そしてまた、彼女が

830

姿を変えて存在している大気から、かぐわしい微風や

こゝちよい音がおとづれて来ます。しかし彼女の存在も

あなたと一緒にならなければ消えてしまうでしょう。さようなら！

第一幕 終り。

後記、テキストは Oxford 版による。字義については主として Ellis
と O. E. D. による。研究社英文学双書中の土居光知氏の“Prometheus

Unbound”は大変参考にさせていただいた。石川重俊氏「縛を解かれたプロミシユース」(岩波文庫)〔絶版〕は見えていない。原典の Preface は省略した。